エンタ目

カンヌで「ユリイカ！」叫ぶ

■ 再編集を突っぱねて ■

仙頭 武則

三時間三十七分、モノクロ、シネマスコープ、映画『ユリイカ』の話。

『地獄の黙示録』の名パブリシスト（広報担当）と五年契約で、前年のカンヌで知り合ったフランスの協力プロデューサー、不可欠とされるセールスエージェントも同国の新興会社と契約、盤石の態勢を二年かけて整えた。一九九七、九九年と監督週間で二作品受賞し、実績も十分できた。プリントを映画祭事務局に直接送り、選考試写は大好評だったとエージェントから連絡があった。

尊敬するヴィム・ヴェンダース監督に「一度では意味がない。何度も来いよ」と激励され、目標としてきたコンペ入選がついにかなおうとしていた、二〇〇〇年春のこと。

ある朝、ファクスと国際便でVHSが届く。ファクスの差出人はジル・ジャコブ、世界の映画関係者でその名を知らぬ者はいないカンヌ国際映画祭の会長（当時）だ。「大変すばらしい作品をありがとう。しかし無名監督の三時間三十七分の作品は観客には長すぎる。三時間以内に再編集してほしい、すばらしい席を用意しよう」。VHSは協力プロデューサーが三時間に再編集したものだった。

夕、青山真治監督来社。最初につながった五時間三十分編集版から場面を落とし、構成を変え、議論と試行錯誤を繰り返し、一こま（一秒二十四こま）を落とすところまで話し合った日々を思い返す時間が流れる。「手を加えるところはもうない」と改めて一致し、互いに晴れやかになった。

深夜、「これからつくるすべての作品をあなたのアドバイスで編集することはできないので、私たちは自分が納得したものを完成とします。再編集はしません」とつづり、明け方に返信した。

数週間後、「コンペティションに招待します」とファクスが届く。さらに数週間、通常なら夜の上映ともう一度上映があるが、昼間に一度だけ上映すると連絡があった。

カンヌ国際映画祭のレッドカーペット。「ユリイカ」は国際批評家連盟賞とエキュメニック賞を受賞した

ソールドアウトになった上映当日、昼間なのでタキシードは着ない。しかし、胸を張って赤じゅうたんを踏みしめ、終映とともに響き始めた万雷の拍手に私たちは長く包まれた。

重要な記者会見、最初の質問者が私を指名し「大長編だが国際版等の短縮版が出てくるのか」。私が「これからもこのバージョンしか存在しません」と答えると会見場に拍手が湧き起こった。「こんなすばらしい光景に出合ったことがない」とパブリシストが何度も耳元でささやいた。心の中で「ユリイカ！（わかったぞ！）」と私は叫んでいた、暴虎馮河な三十八歳だった。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は八月十二日）